

旧東独がドイツの政治の混迷を深める

旧東独社会は住み心地のいい社会だった？

一章：AfD の圧勝と BSW の一挙登場

年齢別の得票率と分析

二章：AfDの圧勝と旧東ドイツを結びつける糸は？

ツァイトガイスト（Zeitgeist＝時代精神）

AfDの魅力：自尊心と保守的な価値観

三章：東ドイツ像は西ドイツが作り上げた「虚像」？

筆者の体験した東ドイツ人と東欧の人

旧東独体制の優れた面：私有財産の廃止、経済面での平等感、女性の高い地位

四章 選挙後の動き：オーストリアの選挙、連立交渉、辞職

歴史の横道：ヒトラーのドイツ国籍

党首の辞職

一章：AfDの圧勝とBSWの一挙登場

州選挙にも拘らず、ドイツの全国民の関心事であった旧東独三州選挙は、極右政党 AfD（「ドイツのための選択肢」党）の圧勝と新規政党 BSW（「ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟＝理性と公正のために」党）の躍進と予想通りの結果に終わった。既成主要政党の CDU と SPD は何とか最低目標は達成できたが、薄氷を踏む勝利だった。信号内閣与党の緑の党と FDP は大きく後退した。現在連立政権組閣の困難な交渉が続いている。

投票率が高まれば、民主勢力(AfD以外の既成政党)への支持率が増えるだろうという淡い期待は、全く叶えられなかった。チューリンゲン州では、州選挙への関心の高さを示す73.6%という、非常に高い投票率だった。ザクセン州でも同様に74.4%と高かった。ブランデンブルク州は、72.9%とやはり70%を超えた。三州とも選挙民の関心が高く、投票率が前回より10%以上も増えている。

州ごとの結果を詳しくみてみよう。

チューリンゲン州	CDU	SPD	緑の党	AfD	FDP	BSW	左翼党	その他
9月1日	23.6%	6.1	3.2	32.8		15.8	13.1	5.4
議席数	23	6		32		15	12	
19年と比較	+1.9	-2.1	-2	+9.4			-18.9	
ザクセン州	CDU	SPD	緑の党	AfD	FDP	BSW	左翼党	その他

9月1日	31.9	7.3	5.1	30.6		11.8	4.5	8.7
議席数	41	10	7	40		15	6	FW=1
19年と比較	-0.2	-0.4	-3.5	+4.1			-5.9	
ブランデンブルク州	CDU	SPD	緑の党	AfD	FDP	BSW	左翼党	その他
9月22日	12.1%	30.7%	4.2%	29.4%		13.4%	3.0%	
議席数	12	32		30		14		
19年と比較	-3.5	+4.5	-6.6	+5.9			-7.7	

出典：各州の選挙管理委員会

テューリンゲン州

9月1日に行われた選挙でAfDは32%を得票し、第一党になった。同州のAfDは、連邦憲法擁護庁によって極右政党と確定され、党首のビョルン・ヘッケは裁判所も認めたファシストなのだが、AfDへの投票者は意に介さなかったようだ。あるいはかえってそのために投票したのかもしれない。州首相の座を狙ったマリオ・フォークト氏のCDUは23.6%と、期待したほど伸びず、第二党で終わった。SPDは6.1%でかろうじて5%を超えた。緑の党とFDPは5%に達せず、議会に残れなかった。少数内閣を率いたラメロー氏の左翼党は、13.1%と半減した。その相当部分は左翼党を割って出たBSWに移ったのであろう。新規政党のBSWは一举に15.8%も得票した。

政権の行方は、CDUとSPDとBSW三党合わせても44議席にしかならない。つまり、かろうじて88議席の半数なのだ。連邦CDUは左翼党との連立を拒否しているので、CDUのフォークト氏は少数内閣を組むしかない。その上で、法案ごとに野党の左翼党か、AfDからの賛成票を仰ぐことになるだろう。

ザクセン州

同日投票のザクセン州は、CDU党首のクレッチマー首相が、ウクライナ戦争に関して、信号内閣および連邦CDUが積極的にウクライナを支援している政治に反対し、さらにロシアに対しても親和的だったこともあり、第一党の座を守ることができた。連邦政府の与党は軒並み落ち込んだ。BSWはやはり一举に二桁の得票率を獲得し、第三党に躍り出た。ザクセン州ではCDU, SPD, 緑の党の三党では過半数に及ばず、左翼党か、BSWの参加が必要になる。連邦CDUは左翼党とは連立拒否しているので、結局BSWに頼るしかない。

ブランデンブルク州

9月22日の選挙でSPDは第1党の座を死守したが、AfDに1%台の僅差に詰め寄せられた。緑の党は5%に達せず、FDPも1%以下で議会を去る結果に終わった。東ドイ

ツの政党として数年前まで存在を示していた左翼党も3.0%しか得られず、議会に残れなかった。新顔のBSWは数ヶ月の準備期間にも関わらず、13.4%とCDUの12.1%を抜いて、第3党の勢力を獲得した。

現職州首相のポイトケ氏は、SPDが第一党にならなかつたら、首相として続投しないという自ら退路を断つという賭けに出て、なんとか勝利したと言える。これからの政権成立には、CDUだけとの連立では、野党と同数の44議席にしか達せず、少数内閣を組むか、BSWとの連立政権を組むかの難しい選択に迫られている。

ドイツの多くの国民にとってショック

ドイツの多くの国民にとってこの三州の選挙結果はショックだった。民主勢力の力を合わせた国民戦線的なAfD反対のうねりがあり、選挙直前にはテューリンゲン州の企業連合による「州には多様さが必要だ」（国際的な企業には優秀な外国人の労働力が必要だ。AfDの勢力が伸びると、これらの外国人の募集は困難になる）との広告を出した。それに対して、党首のヘッケが「これらの企業には将来嵐が押し寄せてくる」と脅かしとも取れる発言をしたために、AfD VS. 経済界の戦いの様相を示した。ところが、州民の一部がAfDへの投票を控えるかとの期待は、全く空振りに終わったところか、得票率がかえって10%近くも増えた始末なのだ。

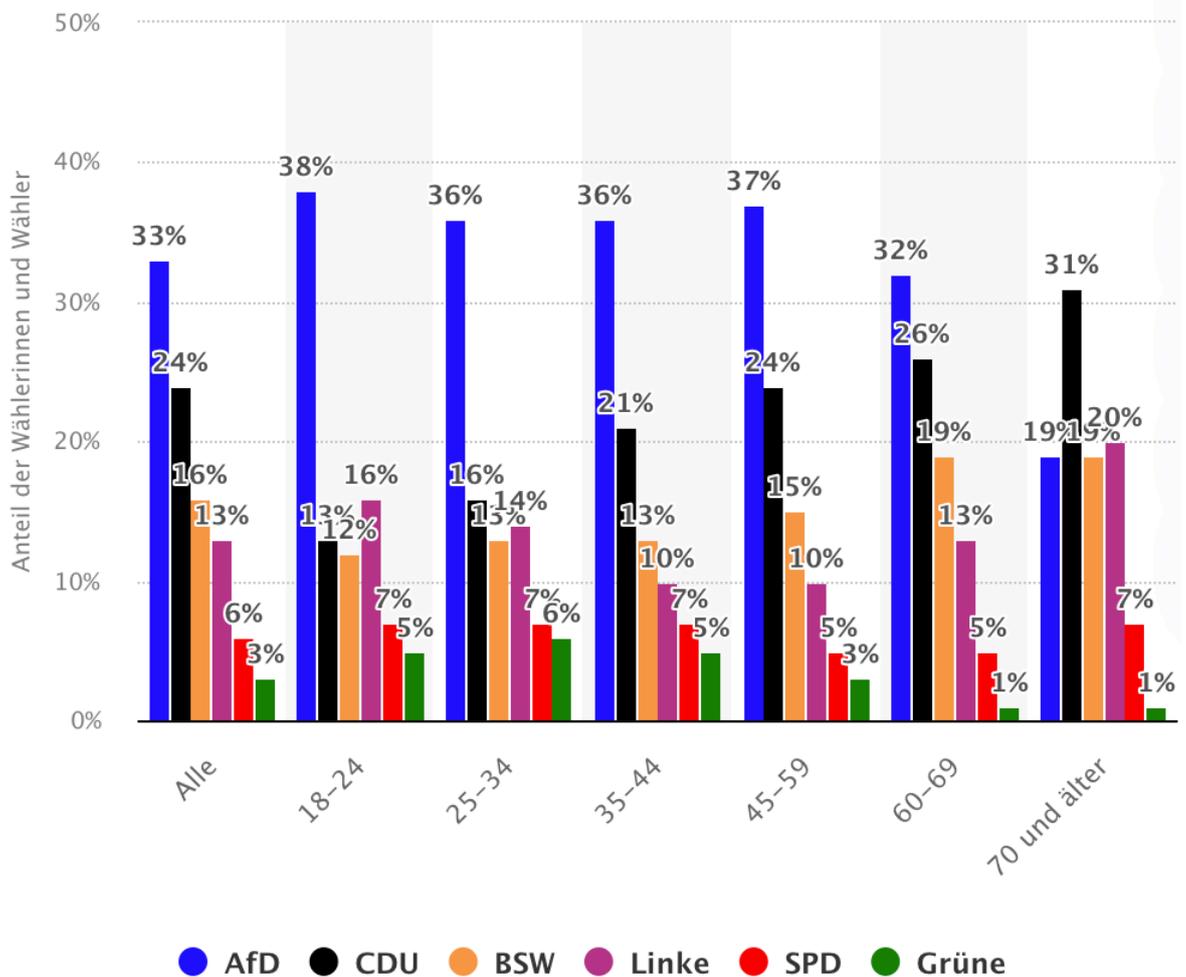
そのAfDの圧勝ぶりを示す数字がある。テューリンゲン州には、候補者を直接選ぶ44の選挙区があるが、そのうち28区でAfDの候補者が当選している。CDUは12区、新興左派政党BSWは4区だ。つまり、圧倒的にAfDの青色（ドイツでは政党を色分けしているが、AfDは青色）だ。唯一の慰めは、AfD党首のヘッケが自分の選挙区では直接選ばれず、比例リストに頼らざるを得なかったことだ

テューリンゲン州とブランデンブルク州の議会では、AfDは「阻止少数」（総議席数の三分の一）の権利を獲得したので、三分の二以上の賛成を必要とする案件を阻止することができる。それらには、州憲法の改正、州議会の議長選出、州憲法裁判所の裁判官任命などがある。

今回の選挙で争点になったのは、三つあった：①難民問題、②ウクライナへの武器支援、③ロシアとの親和的關係だった。これらは、本来、連邦政府の管轄だ。同じ現象がすでにここ数年行われた自治体の首長選挙戦でも見られた。つまり、地域の懸案事項ではなく、連邦政府マターが選挙の争点になっているのだ。

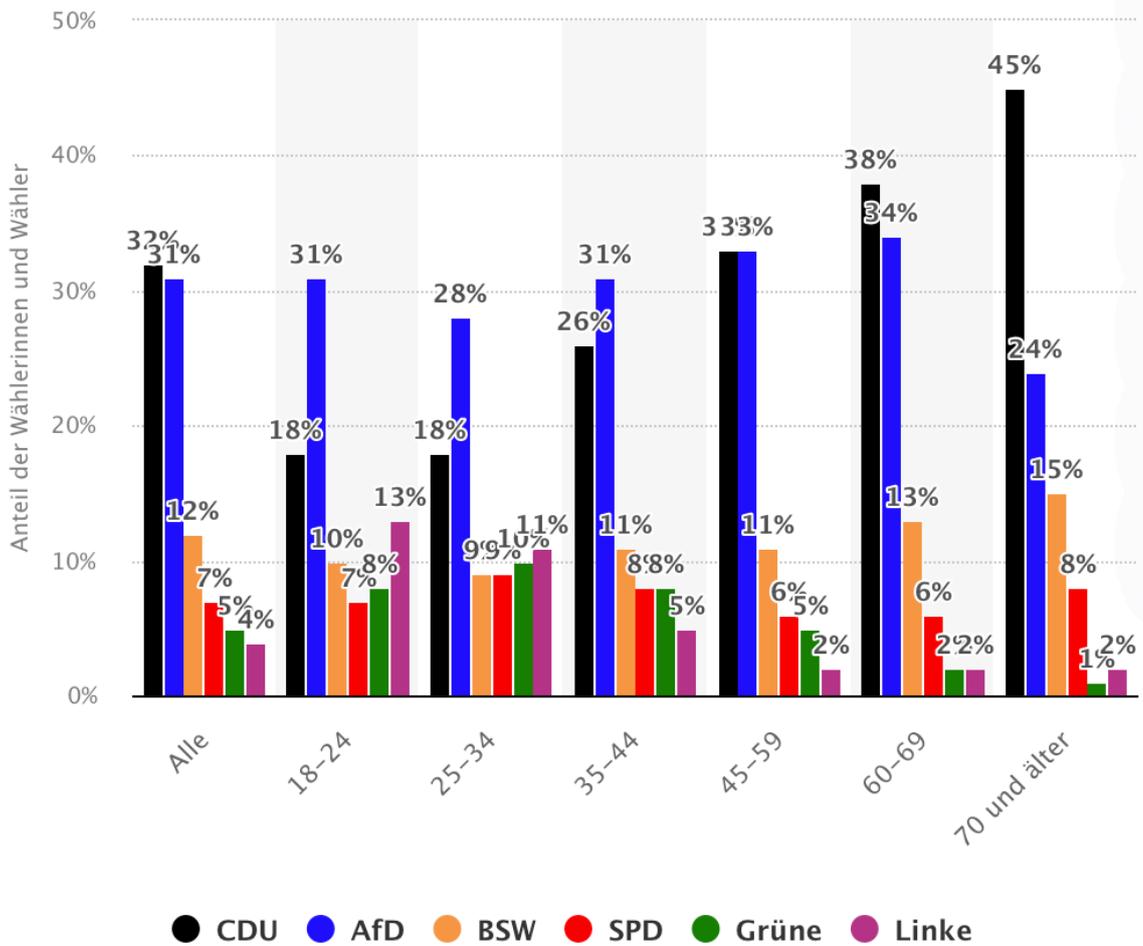
年齢別得票率：圧倒的な AfD の勝利

年齢別の得票率を見ると、より具体的な分析が可能になる。データは、ドイツのほとんどの統計資料を網羅して、プラットフォームで発表しているStatistaに頼っている。まずテューリンゲン州を見てみよう。

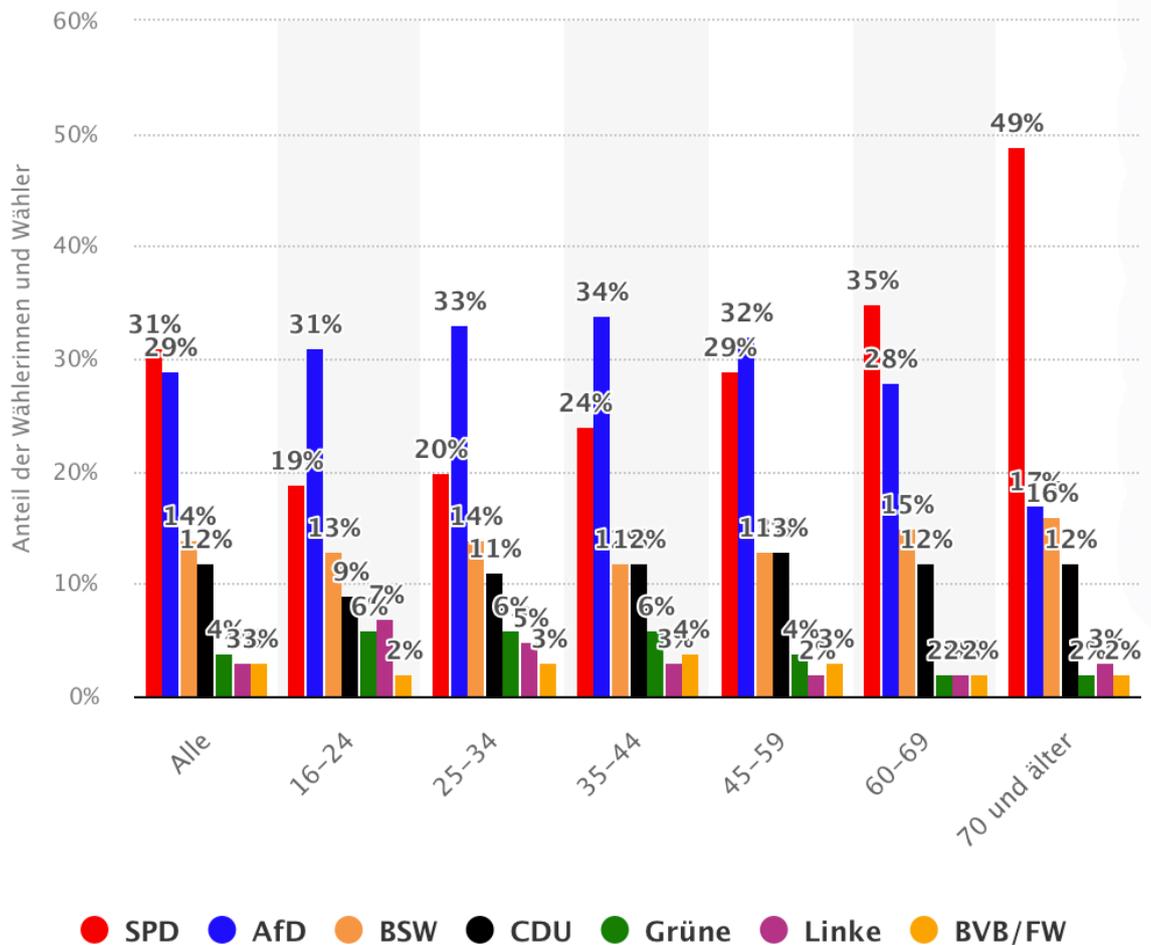


テューリンゲン州では、18歳から69歳まで青色（AfD）が横並びのように第一党を占め、70歳以上になって黒色（CDU）がやっと第1党になっている。70歳以上では左翼党（桃色）が二番手につけているのが目立つ。

衝撃的だったのは、1990年の統一後に生まれ、旧東独社会を全く体験していない18歳から24歳までの世代がAfDに38%、25歳から44歳が36%、45歳から59歳までが38%も投票したことだ。新規政党のBSWはあらゆる年齢層で満遍なく得票しているが、傾向としては高年齢で多少増えている。AfDとは全く違ったパターンだ。それにしてもAfDの圧勝ぶりを見ると、冷や汗が出る。



ザクセン州でもチューリンゲン州同様、統一時にまだ産まれていないか、旧東独社会を物心ついてから経験しなかった世代（18歳から44歳までの年齢層）がAfDを第一党に選んでいる。CDUはやっと45歳から59歳までになってAfDと肩を並べ、60歳以上になってやっと第一党になっている。BSWは、チューリンゲン州同様の傾向だ。少し目立つのは、左翼党が18歳から34歳の世代で二桁の得票率を得て、第三党になっていることだ。全年齢層にわたって30%前後のAfDの得票率を見ると、CDUが1ポイントの差で第一党になれたのは、奇跡に近いと言える。



ブランデンブルク州でも、16歳（同州は16歳から投票可能）から44歳まではAfDが圧倒的に第一党だ。SPDは若年層で20%近く得票し、ジリジリと増えていき、60歳以上になって第一党になっている。70歳以上はSPDが49%と圧倒的に強く、AfDの3倍にも達しているのが目に付く。年金生活者がSPDを救ったとも言える。この結果を指して、AfDのバイデル党首は、「AfDは未来志向の党である。既成政党は年金生活者の党だ」と揶揄していた。

年齢別の得票率と分析

三州の年齢別の選挙結果を見ると、三州とも全くと言っていいほど同じパターンを示している。三つの年齢層に分けられる。

- ① 16歳、あるいは18歳から50歳代までの年齢層でAfDは軒並み第一党を誇っている。ということは、AfDは、現在の40歳（統一時5歳）ぐらいまで、つまり1990年までの旧東独社会を実際に経験していなく、統一後のドイツ社会しか知らない世代の間で圧倒的に強いのだ。
- ② この二つの年齢層に挟まる40代から60歳までのグループは、旧東独社会をあまり知らずに、統一後の短期間の解放を喜んだが、その後の苦しい時代を十分味わ

ってきた世代で、AfD と既成主要政党を同程度支持している。

- ③ 60 歳以上の世代で、主要政党の CDU や SPD に多く投票している。この世代は、旧東独社会を成人（統一時すでに 25 歳以上）として十分に経験し、壁の崩壊を解放として喜び、再統一後の苦難に道を歩まされてきた。つまり、旧東独社会も統一後の社会も十分に経験している世代だ。

参考のために昨年以來行われたヘッセン州とベルリン市州選挙の結果と比べてみよう。ヘッセン州ではAfDの得票率は、18歳/24歳の18%から少しずつ上がり、35歳/44歳の24%で頂点に達し、70歳以上では9%とぐっと下がっている。

ベルリン市ではAfDの得票率は、18歳-24歳の7%から少しずつ上がり、60歳-69歳の12%で頂点に達し、70歳以上では7%とぐっと下がっている。

このようにこれらの二州では、9月の東独三州で見られた16歳あるいは18歳から44歳ぐらいまでの年齢層におけるAfDの高い得票率というパターンは見られない。

第二章：旧東ドイツとAfDの圧勝を結びつける糸は？

旧東ドイツにおけるAfDの圧倒的に高い支持率を解明する試み（仮説）にはいくつもあるが、時代的に三つに分けられる。第一は1990年の統一前の旧東独社会を対象にしている。第二は統一後の喜びから失望への時期を対象としている。第三はコロナ危機、信号内閣登場、ウクライナ侵略戦争以来と三つに分けて、今回の選挙の年齢層ごとの投票結果を踏まえて検討してみよう。

第一の民主主義教育を受けてこなかった東独市民説は、字義通り民主主義の社会ルールが内面化されていないというのだ。監視社会に育ったから体制に対して距離を置く説も、字義通りに理解できる。45年間ソ連の影響下にあってロシアとの親近感説は、45年の間にロシア人と友好関係を結び、悪い面ばかりではなかった。

第一と第二にわたるトラウマ説は、旧東独時代の SED 独裁と秘密警察の監視社会がトラウマになっている。さらに統一後の失望と自己価値観の喪失もトラウマになっている。トラウマは、心理的に次の世代に引き継がれることもある。すると全ての世代に適用できることになる。

第二のフラストレーション説は、東西ドイツ統一後は自由も得られ、良い生活が送れるだろうとの期待は、全く満たされず、二等国民として扱われ、自尊心の喪失にまで至ったという説。

第三は、三党による信号政府が内部争いに終始し、難民問題や経済停滞など問題が山積しているのに解決できないから、政治不信に陥っているという説。将来不安説は、コロナ危機の後ウクライナ侵略戦争が勃発し、経済が停滞している。近い将来産業空洞化が起こり、大量失業の恐れまで予想されている将来不安説。最後に、ツァイトガイスト（Zeitgeist=時代精神）説があるが、ドイツ以外の国々では10

年以上前から自国第一主義ポピュリズムが台頭している。ドイツでも、新しいツァイトガイストとしてドイツ社会を覆い始めている

AfDポピュリズム台頭のような政治現象は単一原因のみでは説明できないだろう。いくつかの要素が複合的に絡まっているはずだ。三州だけのデータだが、人口的に見ると、チューリンゲン州212万人、ザクセン州408万人、ブランデンブルク州258万人と、合計872万人で、ベルリンを除く旧東ドイツの70%を占めるので、東ドイツ全体の傾向として見なしても問題ないだろう。今回の選挙の年齢層ごとの投票結果を踏まえて、これらの説を検証してみよう。

まず「トラウマ説」を取り上げてみよう。1990年のドイツ再統一前の世代③に最も強く現れるはずである。このようなトラウマを抱えた世代は、50歳以上に当てはまる、ところがその世代からAfDへの支持票は減り始めている。ザクセン州はあまり減っていないが、同時にCDUへの支持率も増えている。そして70歳以上は西のメインストリーム政党のCDUとSPDを支持している。旧東独社会から受けたトラウマ説は当てはまらない。再統一による失望からのトラウマも同様である。

「民主主義教育を受けてこなかった東独市民説」も、同じ理由で当てはまらない。この世代は60歳以上、つまり③の世代だろう。確かに民主主義教育を受けてこなかっただろうが、反民主主義的なAfDには投票せず、西のメインストリーム政党のCDUとSPDを支持している。

「フラストレーション説」は②と③の世代に当てはまるが、両方ともAfDに積極的に票を投じていない。

ツァイトガイスト (Zeitgeist=時代精神)

この説は東独市民の全ての階層にわたるポピュリズム支持を解明するのに有効だろう。

長い間ドイツは、ロシアからの安い化石燃料の安定供給があり、経済繁栄と豊かな社会を享受していた。それもあってか、気候変動に対する運動が大きく進展した。緑の党にとっては追い風が強く吹き始め、2021年には緑の党への支持率は26%にも伸びて、一時は第1党の勢力を誇るまでになったほどである。特に若者の間における支持率は圧倒的だった。

ところが4年前からドイツの社会に影が差し始めた。まずコロナ禍が2年続いた。そこからの回復期にプーチンがウクライナ侵略戦争を始め、ドイツの経済繁栄を支えたロシアからの化石燃料がストップした。それ以来、エネルギーの高騰によるインフレが国民を苦しめ、ドイツ経済は低成長期に入った。信号内閣の不手際と不人気はそれらに加わり、政府与党の支持は大きく下降線を辿っている。

このようなドイツを取り巻く大状況がドラスチックに変化し、経済が停滞し、将来への不安が社会を覆っている。つまり、ツァイトガイスト（Zeitgeist=時代精神）が大きく変わったのだ。この傾向は当分続くだろうと見られている。難民問題のある程度の解決とウクライナ戦争が終わり、経済が多少でも上向けば、新しい時代精神になるだろう。それがないと、AfDポピュリズムは西ドイツでも躍進するかもしれない。4年前の総選挙ではヘッセン州ではAfDは16%も得票している。昨年州選挙では、18.4%で、第二勢力だった。じわじわと支持率が伸びている。

世代別に投票パターンを見てみると、旧東独市民の間に蔓延している取り残された感とフラストレーション、将来への漠然とした不安からポピュリズムに向かうツァイトガイストに加えて、体制からのAfDの拒否に自分たちの体制に対する反感が重なっているのではないか、と思われる。見逃してならないのは、AfDは前号で述べたようにソーシャルメディアをうまく活用し、若者層を惹きつけていることだ。

AfDの魅力：自尊心と保守的な価値観

筆者は、AfDに対する旧東独市民の若い年齢層から中年層、①世代の親近感、さまざまな面でAfDが彼らに自尊心、自己価値観を与えているところから来ているのではないかと考えている。AfDは、他の政党に比べて地域活動を精力的に行なっていることが知られている。地域の住民はやっと彼らの悩み、失望の体験に耳を傾けてくれる政党に出会ったのだ。そして、AfDの保守的な価値観と、加えて男性中心主義的な価値観も彼ら一男性が多い一を惹きつけている。

このテーゼを裏付けるシーンが今回のAfDの選挙勝利パーティーで見られた。若手党员たちが勝利に酔って、あるヒット曲の歌詞を自分たちで作り変えて、「みんな、みんな、国外退去にするぞ」と、難民と移民系ドイツ人を国外退去にするぞと歌ったのだ。さらに「東では、家族は母、父、子供を意味する。西ではそんなことはどうでもよく、彼らはとてもオープンだから。西では、アリ（アラブ系の名前）が警察とかくれんぼをする。東では牛と鶏小屋があるが、西にはLGTBQと狂気がある。」（Perplexityによる訳）

このように旧東ドイツにおける保守的な価値観を理想化し、LGBTなどを積極的に認めている（西）ドイツの多文化社会を茶化していた。

第三章：東ドイツ像は西ドイツが作り上げた「虚像」？

西ドイツでは、東ドイツ人を「オッシー（Ossi）」（「東出身者」、あるいは「東ちゃん」、蔑視的には「東野郎」とも訳せる）と呼んでいるが、蔑んだ見方をしている場合が少なくない。西ドイツからはステレオタイプ的な先入観で見ているが、それも旧東独社会を見下している場合が多い。

この点に関して、ミュンヘンから精力的にドイツを紹介している熊谷徹氏が今年3月に『西ドイツがでっち上げた東ドイツ』（オシュマン著）というベストセラーを大きく紹介しているので、孫引きをさせていただく。オシュマン氏は東独生まれで、東独育ちで、現在ライプチヒ大学の教授をしている。

「オシュマン氏は、『統一以来我々旧東ドイツ人が経験してきたのは、旧西ドイツ人による個人的、集合的な侮蔑と辱めの30年間だった。ドイツのメディアは旧西ドイツ人によって完全に支配されており、旧東ドイツについては悪いことばかり報道するか、我々を笑いものにしてている。旧東ドイツ人は過小評価されているばかりではなく、ドイツ社会から完全に締め出されている。旧東ドイツは、悪性腫瘍のように、ドイツの中の異常でみっともない悪の部分として烙印を押されている』と批判する。」（「極右政党躍進の背景に、『西側による差別』への旧東ドイツ人の深い怒り」熊谷徹、「新潮社：Foresight. 24年3月28日」）

筆者もオシュマン氏の憤りには頷けるが、同氏の旧東独時代に関する叙述

「この点（東独人のAfD支持に：筆者注）についてオシュマン氏は、旧東ドイツ人が社会主義時代に身につけた防御本能によって説明を試みている。つまり社会主義時代の東ドイツでは、市民は『国の支配体制（システム）』を敵と見なし、距離を置きながら生活することを学んだ」（同上）と記されているが、筆者は頷けない。

熊谷氏自身も同様の見方をしている。

「彼ら（注：旧東独市民）は社会主義時代の東ドイツで、日頃の言動や行動を常に秘密警察によって監視されていた。国家保安省（シュタージ）の非公然職員（スパイ）の密告によって、反政府的な言動や行動は政府に通報され、直ちに制裁が加えられた。旧東ドイツ市民はこうした経験を持っているだけに、政府による生活への干渉に対し、旧西ドイツ市民よりも敏感に反発するのだ。」がある。（熊谷徹『日経ビジネス』9月5日）

ところが、今回の選挙におけるAfDの年齢別支持層を見てみると、このような監視社会の経験を全くしなかった若者たちにAfD支持者が多いのだ。逆に監視社会を経験したはずの60歳以上の市民たちは、長年政権を担ってきたCDUやSPDなどの主要既成政党に票を多く投じている。

筆者の見るところ、当時の東独市民たちは、西ドイツの市民同様に日常生活の中に喜怒哀楽を感じて、日々を過ごしていたに違いない。「ベルリンの壁」建設の頃に生まれた東独出身の友人に、質問したところ、「日頃監視社会などは意識しなかった。体制批判などをするときだけは意識したけど」という答えが返ってきた。この「日頃の言動や行動を常に秘密警察によって監視されていた」というのは、西側のドイツ人が作り上げた虚像だと思う。

筆者の体験した東ドイツ人と東欧の人

筆者の限られた東ドイツ人との付き合いを紹介したい。庶民の東ドイツ人ではなかったのに、一般化はできないことを断っておく。

筆者は1971年以来西ベルリンに住んでいて、70年代にSDS（社会主義ドイツ学生同盟）の友人たちと東ドイツの知人家族を何度も訪問したことがある。R氏は、スペインの市民戦争では義勇軍に参加したことがある熱烈な共産主義者で、週刊誌の編集長だったが、党からの偏向記事執筆を拒否したので、解雇されてしまった。彼の家―東独の幹部が住むパンコー地区にあった―では、政治についても自由に議論できた。帰りの国境検問は全く問題なかった。

同じ頃体制批判の詩人・音楽家のW.ビアマン氏を日本の友人と二人で訪ねたことがあったが、帰りの検問は問題なかった。

80年代に東ベルリンの中心に住むスペイン語通訳の二人の女性と親しくなり、友人たちと何度も訪ねたことがある。一人はホネカー氏の通訳もしていた。一人はフィデル・カストロ氏の弟のラルフ氏と懇ろの仲で、彼がベルリンに来ると、会っていたが、寝室にまでSPが付いてくる（国家機密?）とぼやいていた。彼女らとの付き合いではシュタージを気にした会話はなかった。

1988年夏に篠田正浩監督の『舞姫』（郷ひろみ主演）の撮影がベルリンで行われ、筆者も撮影を手伝った。主に東独のDEFAスタジオで撮影された。一つの撮影組が担当し、クルーと仲良くなると、彼らが、「組長はシュタージの情報提供者だよ」と教えてくれた。スタジオ内では公然の秘密であったようだ。撮影現場はとても和気藹々とした雰囲気だった。

筆者は1984年から10年間の間に、国際連詩を四回ドイツで企画し、翻訳も担当した。日本からは大岡信氏や谷川俊太郎氏らがいらした。ドイツ語の詩人として都合8人が参加したが、そのうち四人は東独出身か、東欧出身の詩人だった。87年の連詩に加わったのは、東欧出身のドイツ語詩人P氏で、静けさを内に秘めた人物だった。難解な詩を作る詩人として有名だった。彼が亡くなった後、ルーマニア秘密警察の情報提供者だったことがわかり、非常に驚いた。彼と長年親しくしていたノーベル文学賞受賞者のヘルタ・ミュラー氏には、天地がひっくり返るほどのショックだったようだ。P氏は2006年にドイツ最高文学賞ビュッヒナー賞の受賞が決まっていたが、受賞直前に78歳で亡くなっている。

90年の連詩に参加したG.Eさん（当時36歳）は、東独社会を批判し、米国に移り住んでいた。壁の崩壊後シュタージのファイルを見て、非常に信頼し、全てを打ち明けていた弁護士が、情報提供者だったことがわかり、極度の人間不信に陥っていた。谷川さんが、彼女に深いエンパシーを示して、人間性回復に努めていたことが記憶に残っている。

次は、東独の市民運動に参加し、統一後の民主国ドイツに期待をしていたE.Eさん（統一当時53歳）は、鬱的状态で連詩（94年）に参加した。というのは、西

ドイツの一方的な統合で旧東独社会の長所を全て失った上に、人間社会のつながりもなくなった、新しいドイツに深く失望していたからだ。

四人目の詩人 G 氏は当時まだ若く、統一（当時 27 歳）後に開かれた世界は、みずみずしい詩的感性に満たされた G 氏にとって詩作上の宝の宝庫だったようだ。そして素晴らしい作品を次々と生み出していった。日本にも招待されている。33 歳の若さでドイツ最高文学賞ビュッヒナー賞を受賞している。

このように東ドイツ、あるいは東欧圏出身者でも様々な人生があり、トラウマも生まれている。G 氏には全くなかったようだ。G 氏には全く東の雰囲気は感じられなかった。

「東ドイツ」は西ドイツが作り上げた虚像か？

多くの西ドイツ人が一括りにしているような、「旧東ドイツ人」像に当たる人々は果たして存在するのであろうか。「市民は『国の支配体制（システム）』を敵と見なし、距離を置きながら生活することを学んだ」とステレオタイプ的な見方が主だが、多くの国民一庶民一がそこまで体制を敵として意識していたのかは、筆者は疑問に思う。旧東ドイツを「自分の国」と思っていた東ドイツ人が大部分だだろうと想定する方が自然なのではないか。特に 80 年代に入ってから。つまり、この二つの極点の間を揺れ動いていたのが、真実だろうと思う。

1989 年前まで西ドイツの政治家たちも含めて、誰も DDR が突然崩壊するとは思っていなかった。それどころか、半永久的に存続すると思っていた。すると、置かれた環境に慣れ、折り合いをつけることが庶民の生活態度・意識ではなかったろうか。それと東独市民にはストックホルム症候群的な心理作用も働いていたのではないか。筆者から見ると、オシュマン氏も西ドイツの作り上げた東独社会像に惑わされているような気がする。

旧東独体制の優れた面：私有財産の廃止、経済面での平等感、女性の高い地位

ここでテーマになっているドイツ民主共和国とは、一体どんな社会だったのだろうか。まず経済的には、国民が互いに平等に感じられる社会でであったと言える。収入面では 1988 年の数字で見ると、生産労働者は 1150 東マルク（筆者の体験した購買力から感じた交換比率は 1 東マルク：100 円から 150 円ぐらいだった）、マイスター（主任から課長クラス）で 1420 マルク、幹部（工場長）は 1490 マルクだった。運転手は 800 から 1000 マルク。大学の教授も 1000 マルクだった。財産に関しては、不動産などは国家に属していたので、私有財産はなかった。企業も個人所有ではなく、人民所有だった。雇用も保障されていたので、問題を起こさなければ、誰にでも仕事があった。貧富の差は当時の資本主義下にあった西側諸国に比べて、圧倒的に平等な社会であったと言える。保護された社会だったとも言える。

社会のために働いているという意識で、やりがいと自尊心があった。仲間意識と連帯感が強く存在していた。失業の不安も個人間の競走もなかったから、人生上

のストレスもほとんど感じなかつただろう。監視社会のストレスが時にはあったかもしれないが。

加えて東独社会では、教育の分野でも平等であった。子供達には、保育園、学校の席が保障されていた。高等教育になると、親が労働者か農民であった場合、子弟は優先的に入学できた。親が高等教育を受けている場合、子どもたちは高等教育を受ける順番は後回しにされた。それに対して西ドイツなどの資本主義社会に蔓延している親の教育レベル、あるいは財産が子供達の高等教育のチャンスを大きく左右する体制を見ると、東独社会はより民主的だったと言える。学校卒業後の就職も保障されていた。もちろん全員が志望通りには進めなかつたが。

女性の地位は東の方がずっと高く、男女平等が相当実現していた。女性の就業率は、1980年代には80%を超えていた。80年代後半には15歳から60歳までの女性の就業率は91%と世界一であった。これには保育園などの施設が完備していたという社会体制によって可能になった。ただ女性には男性よりレベルの低い仕事が多かった。それと育児、家事度の負担がより女性にかかっていたことを忘れてはいけない。

生活必需品は供給されていたから、贅沢はできなかつたが、それなりの生活は送れた。周りが同じようなレベルで生活していたから、妬みなどはなく、満足度は高かつただろう。問題は、隣国が西ドイツで、こちらは商品社会の豊かさを満喫していたことだ。西ドイツから知人や友人が来て、西の商品を手土産として持ってくると、羨ましく感じることもあつただろう。

体制批判などの自由は制限されていたけれど、高望みをしなければ、満足できる日常生活が十分送れた。夏休みには東欧圏内の海岸でも過ごすことができた。このように見てみると、旧東独社会は、現在の新自由主義経済によって貧富の格差がますます広がり、惨めな貧しい生活を送らざるを得ない、西側社会の中間から下の層の人々には、パラダイスのように見えるだろう。

筆者は、民主主義社会では人々は法の前の平等だけではなく、富の分配もある程度平等であるべきだと思う。収入だけではなく、財産に関しても極端な格差は非民主的である。

資本主義社会における私有財産の憲法保障は、問題だ。ロシア革命を経て、ソ連邦ではやっと私有財産が廃止された。第二次世界大戦の想像を絶せる犠牲の下、ソ連邦が広がり、東独のように社会主義が定着し、私有財産も廃止され、経済成長を目指さない社会が実現したというのに、自由への渴望が社会主義体制を破壊してしまった。市民活動家は、社会主義も自由も実現できるチャンスが到来したと思ったが、歴史の歯車は逆に回され、また私有財産制に戻されてしまった。チェコのプラハの春はソ連の指令により、東独は西側の資本主義により潰されてしまった。振り返ってみると、89年から90年にかけて大きなチャンスを逃してしまったと思うが、当時の西側資本主義体制は、東ドイツの自由な社会主義体制という実験を絶対許さなかつただろう。

だが、理想の共産主義社会に一步でも近づくためにも、富を含む社会内の平等も旧東独社会のように実現されるべきだ。自由で平等に人々が生きられるのが、本当の民主主義だろう。どちらが欠けても、真の民主主義社会とは言えない。

第四章 選挙後の動き：オーストリアの選挙、連立交渉、辞職

オーストリアの国政選挙；極右政党FPÖが第一党

9月29日にドイツの隣国オーストリアで国政選挙が行われ、極右政党のFPÖ（オーストリア自由民主党）が30%を獲得し、第一党になった。FPÖの党首クリックルは、ドイツであったら禁じられているナチス用語を連発し、党そのものもスキャンダルを起こしているが、支持票は増えた。「オーストリアを要塞にして、難民は一人も入れない。現在滞在している難民は全て送り返す」などを選挙前に公約していた。自分は「Volkskanzler＝国民宰相」（ヒトラーはそう呼ばれていた）になるのだと発言しているが、大統領（仏、伊、澳では大統領が組閣指令を出す）が同氏に組閣指令を出すかは、疑問だ。プーチンへの親近感もAfDと似ている。

オーストリアには東ドイツのような歴史はないのに、極右政党が第一党になった。このように見てみると、やはり世界中に蔓延している極端な自国優先主義ポピュリズムは、時代精神と見るべきなのかもしれない。

連立政権交渉

現在東独三州で政権確立のための連立交渉が進められているが、BSWがやはり台風の目となっている。問題になっているのは、BSWのSW氏が「連立の譲れない条件として、ドイツはウクライナに対する武器支援を控え、外交にもっと力を注ぐべきであるという方針に賛成すること」、とこれまでのSWの主張を繰り返していることだ。

このように州政権の連立交渉で、国際的な紛争への取り組みを条件にするのは珍しい。まず州政府は外交上の交渉に全く関与できないし、CDUもSPDもウクライナへの武器供与を積極的に支援している。その方針をBSWの圧力に負けて、取り下げることはしないだろう。

チューリンゲン州では、選挙の3週間後に最初の議会が開かれた。ドイツ議会では通例として、最年長の議員がとりあえず議長を務める。そこでAfDのユルゲン・トロイトラーが議長を務めたが、形式上の議長にも関わらず、他の政党の発言を阻止したり、さらにはマイクのスイッチを切ってしまうなどの職権濫用を行なった。CDUは即刻州憲法裁判所に、AfDのトロイトラーの行為が、憲法違反に当たると緊急訴訟を起した。翌日には同裁判所は違憲の判決を下した。

このように AfD は法案を阻止できる阻止少数（議員数の三分の一）の権利を獲得しているのに、こられる権利を悪用して、議会攪乱をするだろうと予想されている。このような行為は、前述したように一世紀前の苦い歴史的一幕を思い出させる。それもあって、AfD を政党として禁止しようという議論が再燃している。ただ、政党禁止は憲法裁判所による非常に困難な法的手続きなので、無理であろう。このテューリンゲン州に絡んでちょっと歴史の横道に入るのを許してほしい。

歴史の横道：テューリンゲン州とヒトラーとドイツ市民権（＝国籍）

テューリンゲン州といえば、ドイツにとって苦い思い出のある州なのだ。今から96年前、つまり1930年にナチス党（NSDAP＝「ドイツ社会主義労働者党」）がドイツで初めて政権入りを果たした州なのだ。つまり、33年以降に政治の舞台でナチス化の先陣を切った州なのだ。

1930年にヒトラーの盟友とも言えるウィルヘルム・フリックが、ドイツで最初のNSDAPの大臣としてテューリンゲン州政府の内務兼国民教育大臣に任命された。フリックは内務省と教育機関から共産党やSPD系の職員を解雇していった。そして学校でもゲルマン民族至上主義的な歴史観を教えるように指示した。

後に判明した事だが、フリックは、1932年初頭にヒトラーをヒルデブルクハウゼン市の警察本部長に任命し、ドイツ市民権を与える企てをしている。だが、最終的にヒトラーが同意しなかった。その代わりに、同年にブラウンシュバイク州のディートリヒ・クラゲス内務大臣（NSDAP）の画策により、同州の政府顧問官に任命されて、市民権が得られた。これでその後のヒトラーの政治家としての経歴に間に合ったと言える。ドイツの市民権（＝国籍）がなかったら、ヒトラーはドイツの首相に就任するのは困難だったからだ。すると、歴史はまた違った経過をたどったかもしれない。

ヒトラーはオーストリア＝ハンガリー帝国のリンツで生まれた。しかし、オーストリア国籍を嫌い、1915年に同国籍離脱を申請し、無国籍者になっている。NSDAPの党首として、正式のドイツ国籍を持たないことは、彼の支持者の間でも問題になっていた。本人は1914年にドイツ帝国陸軍に志願し、5年間戦い、負傷までしたことで、十分にドイツ国籍者だと当時主張していたが、ワイマール共和国の正式の職、たとえば大統領あるいは首相に就くには、法的に問題があった。そのため、ゲッペルスが中心になって画策をしていた。それが、前述したように、ブラウンシュバイク州政府のナチスのクラゲス内務大臣により、正式のドイツ人になれた。この後ヒトラーは大手を振って、大統領に立候補したのだ。この選挙では、ヒトラーに対抗するためにSPDや民主勢力がワイマール連合を組み、ヒンデنبルクに投票するように呼びかけた結果、ヒンデنبルクは53.1%、次いでヒトラーは36.8%となり、前者が大統領になった。だが、33年にはヒトラーは正式のドイツ首相に就任し、第三帝国総統として人類最大の大犯罪を犯したのだ。

ヒトラーは、彼が育ったオーストリア＝ハプスブルク帝国の多民族性及び多文化性を嫌悪し、後には人種的にドイツ人のみによるドイツ第三帝国を創出しようとした。その最大の阻害要因がユダヤ人種と思い込み、ユダヤ人の絶滅に向かったのだ。単一民族、単一文化によるドイツ帝国が彼の強烈な願望で、さらに妄想にまで発展した。右翼や極右は、概して同じような願望を持つ。だから共同体内における異物＝外国人種＝を嫌う。しかこのような共同体は、現実には存在しない幻想ではない。

党首の辞職

10月3日に将来の州首相と目されている政治家フォクト氏（テューリンゲン州）、クレッチマー氏（ザクセン州）、ポイトケ氏（ブランデンブルク州）が連名でドイツの高級紙FAZ（『フランクフルター・アルゲマイネ紙』）に投稿した。そこで、連邦政府はこれまで以上にウクライナ戦争の終結に向けて外交上の努力を一層すべきだと訴えた。BSWの要求に応じた形だ。S.ヴァーゲンクネヒト氏はこれを高く評価している。CDU, SPD, 緑の党、FDPの党首あるいは幹事長は、BSWの要求に屈服したと批判している。

9月29日に緑の党の共同党首の二人が選挙結果の責任を取って辞任した。特に28歳の若さで党首に就いたりカルダ・ラング氏の辞任は惜しまれている。才能のある女性なので、再登板はあり得るだろう。

10月5日には、SPD幹事長のキューナート氏が健康上の理由で辞任した。32歳の若さで政府与党の幹事長に就任し、21年暮から、つまりショルツ政権誕生以来3年間激務をこなしていた。この間プーチンのウクライナ侵攻が始まり、ロシアとの関係断絶、経済及び国際政治の大幅な転換、評判の悪いショルツ首相の擁護と獅子奮迅の活躍を見せていたが、健康を害してしまったようだ。

ドイツは現在米国の大統領選挙が最大の関心事だ。結果次第では巨大な津波が襲ってくるからだ。「もしトラ」が実現すれば、外交、防衛など真っ先に影響を受ける。そしてウクライナからの難民は現在の100万人以上に加えてさらに増えるだろう。ドイツ社会全体に及ぼす、被害の規模はあまりにも大きいのでとても予想できない。ツァイトガイストは真っ暗になるだろう。

福澤啓臣

ベルリン

2024年10月21日